平成３１年３月７日（木）

老球の細道４６８号

「自信」についての一考察

会津バスケットボール協会　　室　井　冨　仁

日本男子バスケットボールチームのワールドカップ出場が決まった。先月の２４日、２次予選の最終節でカタールをアウエイで破り、F 組２位で予選を突破した。予選を突破しての出場は１９９８年大会以来である。その頃はイラン等の中東アジアはまだ弱く、オーストラリアなどもアジアグループではなかったので、ライバルは中国、韓国、フィリピンくらいだった。今大会はそれに比べると予選突破のハードルの高さは比較にならない。

東京五輪を控えて何としてでも W 杯出場を果たさなければならなかった日本代表は、就任して間もない長谷川 HC を解任し、アルゼンチンのフリオ・ラマスを新 HC に迎えた。私はトステイン・ロイブルに指揮を執ってもらいたかったのだが・・・・・。

予選で開幕４連敗して、その後なりふりかまわずファジーカスを帰化させ、渡辺、八村なども代表に加えた。ここからサプライズが起きた。世界ランク上位のオーストラリアを 1 点差で破ってしまったのである。それから破竹の８連勝。

正直言って、第９戦以降は八村、渡辺を欠いたメンバーだったので無理だろうと思っていた。ところが、彼らがいなくとも、他の日本人メンバーが確実に力をつけていた。米国組を欠いた日本代表は今まで見たこともないパフォーマンスを見せてくれた。特にビックマンとして存在感がなかった竹内（A 東京）が別人２８号の大活躍を見せてくれた。選手は何かのきっかけで大きく変わる。何かのきっかけとは、言うまでもなく「自信」である。自信とは、広辞苑によると「自分の能力や価値を確信していること」とある。

ラマス監督は「一番は、彼らと共に勝った経験から刺激を受け、国際試合で戦えるという自信を他の選手も持つようになったこと」。代表最年長竹内は「渡辺、八村２人がいないと勝てないという見方を覆したかった」。主将の篠山は「以前はどこか負け癖みたいなものがあったが、あの１勝が自信になった」。富樫は「３人の加入で勢いに乗ったことは間違いないけれど、B リーグで選手個々がレベルアップしたからこそここまで来られた」。

ところで、勝利によって自信はできるが、負けてばかりいるチームはいつまでたっても自信を持てないのだろうか。そんなことはないと思う。弱いチームでも勝ち負けに左右されない「自信」を持つことはできる。そのような「自信」とは読んで字の如しで「自分を信じる」ことである。自分で自分を信じられるような行動をすることである。

ポイントは「２４時間、私は私である」。バスケットボールでがんばっている自分と学校の授業でがんばっている自分は同じである。部活動の顧問に対する挨拶とそれ以外の先生に対する挨拶も同じようにできる。いつ、どこでも、誰にでも、どんなことでも好き嫌いに関係なく同じように対応することができるように毎日努力することが「本当の自分」を作り、自分で自分を信じられるようになる。他人との比較ではなく、自分自身との闘いによって創り上げられた自信は「本物の自信」である。

あきらめて負け続ければ、いつまでたっても勝つ可能性はない。しかし、自分が努力してきたことに「自信」を持って、抵抗して負けている限りは、いつかきっと勝利の女神が前髪を積ませてくれるチャンスが訪れるものである。ちなみに、勝利の女神は後頭部が禿げていて前髪しかないようである。